

先日、現在日本の自信が失われているという記事が新聞に載っていました。長引く不況や混迷する政治、北朝鮮の外交問題等々、現在われわれの周りには様々な問題が山積しています。その中で「日本は不完全で欧米諸国より劣っている」「もともと日本は欠点だらけの国だ」などという考えをわれわれ日本人が潜在的に持っているために、日本の国力が低下してきていると述べていました。これは日本人1人ひとりの自信や自尊心が一昔前に比べて少なくなってきた現れであろうと思われます。

では、個人の自信を取り戻すにはどのようにしたら良いかを考えてみましょう。現在の自分は仕事・人間関係・家庭環境の全てに満足しているという人は少ないと思います。ほとんどの人が何らかの不満を持っていて、それを変えたいと考えている人が大半でしょう。しかし「もし技師ではなく別の仕事をしていたら、もっとお金持ちになっていたのに・・・」というような考えは、自分の行動についても責任を持たず、今の自分を否定する考えが増幅されます。その結果、自分がいつも劣っているように感じ、ますます自信が失われていきます。このような考え方ではなく、自分というものをそのまま受け入れるだけで充分自信が持てるような気がします。「私は現時点でのベストを尽くしている」「自分のこれまでやってきたことが役に立っている」などのように自分の長所に目を向ければきっと多くの事柄が見付かるでしょう。他人と比較して無理に変えようとしている自分に気が付けば、随分と気が楽になります。全ての人は価値のある人間で、この世に価値のない人間なんて存在しません。

ここで、自信を回復し自分自身の価値を高めるためには、いろいろな道具があればより簡便に行うことも可能です。この道具の一つが学会活動ではないかと思います。病院によっては「学会活動するくらいなら業務をもっとしなさい」「論文は業務に関係ないので読んだり書いたりする必要はない」との考えで学会を否定的に捉えているところもあると聞きます。一方、技師本人においても「学会発表しても一銭の得にはならない。むしろ損する」「論文を書く時間があればテレビを見る」などと言って、研究を含めた学会活動を行わない人もいます。このような考え方を持っていたら、今後の厳しい競争時代に勝ち抜くことは恐らく困難でしょう。それは、自己の価値を高めない人は進歩がないためにより良い医療サービスが提供できないでしょうし、自信のない医療スタッフが多いと病院は患者から信頼されません。

学会発表をするということは、行う技師にとって大きな負担であり、苦しいものです。しかし発表を終えた時、本人にとっては大きな満足と自信を手にすることができ、ましてや論文を執筆し、採択されることは発表するよりもっと大きい自信を得ることになります。私は学会活動の価値はここにあると思います。確かに研究をすることによって、新しい知見を皆に知らせることも重要です。しかし、学会活動を通して技師という仕事の自信と自尊心を持つことが、病院にとっても大きな財産となります。学会とは自己の価値を高める道具と考えていいのではないかと思います。

RI 業界も薬剤や装置の売り上げが伸び悩み、CT・MRI・エコーなども従来核医学の独壇場であった機能や代謝画像に迫ってきています。このような厳しい状態の中、RI検査はまだまだやり残していることが多くあり、PETを含めこれからますます延びうる分野であるのは間違いのないところです。そこで核医学技術を担うわれわれが自信を持つことにより、核医学全体の活気を生むことも可能なのです。そのために、皆さんには少しでも本学会を利用して戴きたいと思っています。

本年最初の巻頭言にあたり、2003年はわれわれの学会を通して会員諸氏の自己価値が少しでも向上できるように、手助けをしたいと理事一同は考えています。